

発 刊 の 言 葉

Preface

静岡県自然保護協会会長 桜 場 周 吉

総て学問は民衆の中から生れたことは多くの分野の学問をその歴史にさかのぼってみれば明らかなところ
であります。しかし科学が発達してゆくに従い学問の多くは学者と称する一群の専門家の手にゆだねられて
仕舞ったのであります。しかし本来学問は民衆の手もとにあるべきであります。およそ、科学としての知識
は総て専門学者の手によつてのみ人々に伝達されるべきものでなく、民衆の間から生れた生硬な学問として
の研究・調査・観察等を通じて伝わってゆくことも大切であります。それは多くの人々に自らのものとして
親しみを持って受取られてゆくからであります。各地方に見られる郷土誌とか、博物誌などの刊行がその一
つの現われでありまた民衆のための色々な博物館なども一つの姿であります。

この度静岡県自然保護協会のメンバーによつて「東海自然誌」が刊行されたのも上記の趣旨からと思いま
す。大学におられる専門家と称する人々のみではなく民間の方々も混じつて動物、植物、地学等に関する研
究調査の結果を発表する機関誌がこのような形で刊行されることは人々に身近にある学問を自分らにとりも
どすと共に、人々に自然との関係をもう一度考えなおしてみる端緒にもなることと思ひます。このような研
究、調査がこれからも続いて発表されると思ひますが、ねがわくば民間からも優れた篤学の方が多く出て下
さることをねがっております。そしてやがては静岡県の自然博物館や科学博物館等の設置となり、それらの
機関誌にまで発展することになればうれしいことと思ひます。

本誌のような企ては二、三年前より話題に出ておつたのでありますが、意外に早く実現し得ましたことは
大村敏朗氏の御厚志によることが大きいのでありまして、同氏に深く謝意を表すところであります。大村
さんについては巻末に杉本順一氏による御紹介もありますが、県内の植物学についてのかくれた先達であり
ます。本誌をひもつかれる方は身近かにわが郷土をこの上なく愛されている多くの人々があられることを感
じとられるよう希望致します。そして、特に若い人達が自らも自然の探究に情熱を傾ける動機になつて下さ
るならば、本誌の刊行の意義の一端が達せられたことになると信じます。(S49.9.24) S. SAKURABA